しっかりとした河川改修を望みたい

被災者（川原町）
富澤　満郎さん

―災害当時の状況を教えてください―

昭和47年の水害の経験から、これ以上浸水してこないだろうと思っていました。また、当時の水害後、河川改修により堤防ができて、大丈夫だとみんなが思っていました。しかし、今回は、3，500トンを超える放流量で、予想をはるかに超える速さで増水し、浸水しました。また、河川改修により、移転をした長崎団地までもが浸水したことは、思いもしませんでした。

―災害当時を振り返り、感じたことは何ですか―

避難誘導の在り方について改善すべきことがあります。

当時、行政などの関係機関は「水が増しますから避難してください」と避難を呼び掛けましたが、危機感を感じることができませんでした。「ダムが何トン放流をします。浸水しますので、早く逃げてください」などと明確に情報を提示し、避難誘導をすべきであったのではと思います。

―最後に復興へ向けて望むことをお聞かせください―

まず第一に、二度とこのような災害が起こらないように、地域の住民が安心して暮らせるような河川改修を望みます。また、河川改修と併せて内水面対策についても実施して欲しいです。

当時の宮都大橋

早期着工・早期完成を目標に業務を推進します

災害復興対策課
災害復興調整監
坂本正己

―今年の4月に、国土交通省九州地方整備局から災害復興調整監として本町に来て頂きました。これまでの各地域での住民説明会や懇談会などで感じたことは何ですか―

昨年の7月23日に、鶴田ダムへの応援要員としてさつま町へ来ており、さつま町の被災状況を予細に見ています。

4月にさつま町に赴任したときには、「良くここまで復興したな」というのが第一印象でしたが、地域住民の皆様方からの話をお伺いすると共に現地を詳細に見てみると、まだ、完全には復興していないということが分かりました。

災害時の情報伝達などについては、住民の皆様より「鶴田ダムの洪水調節に関する検討会」へ多様な意見を出され、それらのほとんどが採用される事となったことは、災害に対する危機意識が高いことの現れと考えております。

なお、今年より河川の水位観測所の水位の表示が五段階のレベル表示となるなど、次に取るべき行動が分かりやすい表示となっておりますので、早めの避難準備・避難などの参考として頂きたいと考えております。

―調整監としの復興に対する思いは何ですか―

これから川内川激甚災害対策特別緊急事業の詳細な計画が各地区毎に示されることとなっています。

この激特事業を進めるためには住民の皆様の協力が最も重要になります。

私としましても、地域住民の皆様のご意見を伺いながら、川内川河川事務所との調整を十分に図り、工事の早期着工・早期完成をを目標として業務を進めて参ります。